様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月２０日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００７　～　２０１０
課題番号：１９５２０２８１
研究課題名（和文）　スイスの多文化主義とナショナル・アイデンティティ

研究課題名（英文）　Multiculturalism and National Identity in Switzerland

研究代表者
増本　浩子（MASUMOTO HIROKO）
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：１０１９９７１３

研究成果の概要（和文）：４つの公用語をもつスイスは、多文化の平和的共存の成功例としてよく知られている。しかし、スイスの現代作家たちは理想化されたスイスの「神話」に批判的な目を向ける。たとえばデュレンマットは、スイスにおいては４つの文化圏が互いに無関心に併存しているだけだと主張する。また、スイスの多文化主義の起源は建国の精神に求められ、建国神話（特にヴィルヘルム・テルの神話）はスイス軍の存在と深く結び付いて、スイス人のナショナル・アイデンティティを形成しているのであるが、フリッシュやビクセルは、スイス軍をめぐる神話がスイス人の「過去の克服」を妨げている点を批判している。

研究成果の概要（英文）：Switzerland has four official languages and is known as a successful example of peaceful coexistence of many different cultures. Swiss modern writers however express their critical opinions about “myths” of idealized Switzerland. Friedrich Dürrenmatt e.g. insists that four cultural regions don’t interact very much and there isn’t any real cultural exchange of four different cultures. Multiculturalism in Switzerland has its origin in the spirit of the Old Swiss Confederacy. Its founding myth (especially the myth of Wilhelm Tell) justify the Swiss Army which is closely related with Swiss National Identity. Max Frisch and Peter Bichsel regard this myth of the Swiss Army as a disturbing factor for Swiss “Vergangenheitsbewaeltigung (working through the past)”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総　計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：ドイツ文学、スイス文化論、多文化主義

１．研究開始当初の背景

今日の世界では、交通手段や伝達技術の発達に伴って、様々な分野におけるグローバル化と多文化化が、これまでに類を見ないほどの規模と速度で進んでいる。ヨーロッパにおけるグローバル化の動きは、何よりもまず EU という形態をとっている。EU 加盟国間で人と物と金の移動が自由になり、これらのものが大量に国境を越えて自由に移動することによって、様々な地域の生活習慣や思想、

言語、文化などもこれまでになく自由に移動し始めた。しかしその一方で、ネイションとは何かという問題が再びアクチュアルなものとなってきた。長年にわたって東西ヨーロッパを隔ててきた鉄のカーテン消滅し、中・東欧諸国にまでも EU が拡大して、有形無形の様々なバリアが取り払われていくプロセスの中で、国民国家という「想像の共同体」がこれまでにも増して強く意識されるようになってきたのである。その典型的な例が、ユーゴスラヴィアの解体であろう。

悲惨な内線の末に解体してしまったユーゴスラヴィアとは対照的に、スイスは 1291 年の建国以来、多民族が共存する多言語・多文化の国であり続けている。国民国家形成の過程において、国民が共通した言語、すなわち「国語」を持つという幻想が成立したが、スイスには「国語」をひとつにまとめ上げていくメカニズムは存在せず、九州ほどの狭い国でありながら、公用語が 4 つも存在している。多様な言語を許容しているという点でスイスは、現在のように世界中で多文化主義が声高に語られるはるか以前から、すでにポスト国民国家の理想的な形態を実現し、国民国家の呪縛から逃れられないでいる他のヨーロッパ諸国がめざす、未来の多文化社会を先取りしていると言えるのである。

ところがその一方でスイスは、EU 加盟を断固として拒否する姿勢が象徴的に示しているように、他者との関係を欠いた陸の孤島でもある。

このようなスイスの閉鎖性を鋭く批判したのが、マックス・フリッシュやフリードリヒ・デュレンマット、ペーター・ビクセルといったスイス人の現代作家たちである。彼らはスイスについての評論やエッセイを数多く残し、小説や戯曲にもその批判精神が大きく反映している。にもかかわらず、従来の研究は彼らの作品を広い意味での「ドイツ文学」ととらえ、スイスの特殊な社会事情や、ナショナル・アイデンティティに関連する言説を考慮に入れてこなかった。それは、ドイツの文学研究においてスイスの特殊性が無視され、そのような研究方法がそのまま日本に輸入されたためであり、またスイスにおける研究では、スイス表象をめぐる文学と政治の関係というテーマ設定そのものがタブー視されてきたためでもある。

２．研究の目的

本研究は多言語・多文化の国スイスの特殊性を明らかにするとともに、スイスのナショナル・アイデンティティをめぐる政治的言説と文学との関連について考察することを目的とした。その際、特に次の 2 点を明らかにすることに重点を置いた。

(1)多文化共生社会のモデルとしてのスイス：
①ユートピア・モデル：スイスはどのような点において、多文化主義をめざす EU の未来を先取りしているか。
②アンチ・ユートピア・モデル：スイスが陥っている多文化主義のジレンマとは何か。

(2)スイス表象をめぐる文学と政治の関係：
スイスにおいて文学とナショナリズムがどのように関わってきたか。

３．研究の方法

20 世紀を代表するスイス人作家マックス・フリッシュ(1911-1991)とフリードリヒ・デュレンマット(1921-1990)のスイス論を主な分析対象とした。取り上げた作品はフリッシュの『学校のためのヴィルヘルム・テル』*Wilhelm Tell für die Schule* (1970)と『軍隊なきスイス？』*Schweiz ohne Armee?*(1989)、デュレンマットの『私のスイス』*Meine Schweiz* (1998)である。（デュレンマットの『私のスイス』は 1960 年代から 80 年代までに書かれたスイスに関するエッセイをまとめたアンソロジーで、デュレンマットの没後に編纂された。）このふたりの作家に注目したのは、彼らが偏狭なナショナル・アイデンティティに固執するスイスの閉鎖性を批判し続けたからである。

スイスは多文化社会でありながら、解体することなくひとつの国としてのまとまりを保持し続けるために、特殊なナショナル・アイデンティティを必要とする。このスイス特有のナショナリズムが第二次世界大戦中のスイスの知識人の態度を大きく左右したのであるが、それを批判することはスイスに対する裏切り行為とみなされてきた。そのため、それを断行したフリッシュやデュレンマットは「非国民」扱いされてきたのである。

また、20 世紀後半に書かれたスイス批判が、21 世紀の今日、どの程度のアクチュアリティーを持っているのかを検証するために、最近のスイスにおける政治的な動き（特に国民投票の結果）について考察した。その際、フリッシュとも親しい間柄にあったスイス人作家ペーター・ビクセル(1935 年生まれ)の *Des Schweizers Schweiz* (1967)を考慮に入れることによって、デュレンマットやフリッシュの主張をより明確に理解することを試みた。

スイスの多言語・多文化状況に関しては、スイスの哲学者エルマー・ホーレンシュタインの考察『範例スイス』*Schulbeispiel Schweiz* (1998)を参照した。

４．研究成果

（1）ホーレンシュタインは、ヨーロッパでナショナリズムが高揚し、同一の言語の使用こそがネイションの証とみなされていて、そ

のことが政治的な統一を正当化していた 19 世紀にあって、スイスが多言語主義の立場をとる憲法を制定した(1848 年)ことを高く評価している。

(2) デュレンマットは、「盟約者団」としてのスイスがどのようにして成立したかという経緯が示しているように、スイスは小国の集合体であって、スイス人というネイションは存在しないということを指摘した上で、その国家形態がヨーロッパの未来を先取りしたものであると主張している。

(3)しかし、その一方でデュレンマットは、スイスそのものが多言語の国であっても、ひとりひとりのスイス人は必ずしも多言語使用者ではなく、特にドイツ語圏スイスとフランス語圏スイスとの間に深い溝があることを指摘して、スイスにおける多文化共生は多くの場合「神話」にすぎないことを明らかにした。

(4)さらにフリッシュは、英雄ヴィルヘルム・テルにまつわるスイス建国神話を書き換える作業を通じて、テルを国家的イデオロギーに利用しようとする現代スイス人の態度を批判している。

(5)農民階級出身で武器を常に携帯している 13 世紀の英雄ヴィルヘルム・テルは、スイス民兵のプロトタイプであり、彼の存在が 20 世紀においてもなおスイス軍の正当性を裏付ける根拠となっていた。このことは 1989 年にスイス軍廃止のイニシアティヴが国民投票によって否決されていることに見て取れる。(フリッシュの『軍隊なきスイス？』はこの国民投票に際して書かれたものである。) 軍隊がナショナル・アイデンティティに関わるものである以上、多くのスイス人にとって「軍隊なきスイス」は一種の形容矛盾でしかなかったのである。スイス軍廃止のイニシアティヴは 2001 年にも国民投票によって否決されている。

(6)また、スイス男性は兵役期間中、武器を家庭内で保管することを義務付けられているが、この制度の廃止を求める声に猛反対している団体の名称が「プロ・テル協会」であることも象徴的である。2011 年 3 月、家庭における武器保管に反対するイニシアティヴは国民投票で否決され、多くのスイス人にとっては今もなお、テルと同じように自ら武器を手にして自由と独立を守ることがスイスの価値であり、ナショナル・アイデンティティの問題であることが明らかになった。

(7)ビクセルは、スイス人が本当に誇るべきなのは 1848 年の精神(この精神に基づいて、ホーレンシュタインが高く評価する多言語条項を含むスイス憲法が制定された) であるにもかかわらず、スイス人が 1291 年のテルの精神を拠り所にしていることを批判している。テルは結局のところ架空の人物でしかないし、テルのイメージを作り上げたのはドイツの作家フリードリヒ・シラーだからである。シラーのテルは、文字通りの意味でも比喩的な意味でも、スイス人の言葉を語っていない、とビクセルは主張する。

(8)スイス軍の存在を揶揄するのは、スイス人作家が自国を批判するときの常套手段である。たとえばデュレンマットは、19 世紀半ば以降、一度も実戦を経験したことのないスイスの、自称「強い軍隊」を痛烈に批判し、ビクセルはスイス軍が守っているのはスイスの自由や独立ではなく、その富であると皮肉った。

(9)「強いスイス軍の神話」の背景には、スイスが第二次世界大戦の戦禍を免れたという事情がある。スイス人は、スイスがヒトラーの侵攻を免れたのはギザン将軍と彼が率いたスイス軍の功績だという神話を作り上げたのである。しかし実際には、スイスがナチスと協力関係にあったことが戦争に巻き込まれなかった最大の理由である。

(10)1960 年代から 80 年代にかけて、デュレンマットたちが最も問題視したのは、スイスの「克服されていない過去」だったが、これは 1996 年になってベルジエ委員会が設立され、詳細な調査報告書が完成したことによって、ある程度は解決された。

(11)自由、中立、多言語・多文化主義というスイスの国是が、一方では EU の未来を先取りするものでありながら、他方でははやり理想通りにはいかない現実がある。にもかかわらず、理想郷スイスという国際的な「誤解」をいいことに、スイス人自身もその現実から目をそむけていることを、スイス人作家たちは批判してきたし、現在でも批判し続けている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①<u>増本浩子</u>「ペーター・ビクセルのスイス論」、『DA』（神戸大学ドイツ文学会編）第 8 号、2011 年、21－38 頁、査読なし
②<u>増本浩子</u>「スイスにおける多言語・多文化主義」、『神戸大学文学部紀要』第 27 号、2010

年、17-33 頁、査読なし
③増本浩子「スイスの国民投票から見えてくるもの」、『DA』(神戸大学ドイツ文学会編)第 7 号、2010 年、31-39 頁、査読なし
http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/81002035.pdf

〔学会発表〕(計３件)
① MASUMOTO Hiroko: Peripherie als Zentrum: Multikulturelle Situation in der Schweiz.
Internationales Kolloquium „Illusion der Grenze: Dynamik der kulturellen Prozesse zwischen Zentrum und Peripherie“. (ベルリン自由大学主催)、2009 年 3 月 2 日、ベルリン自由大学(ドイツ)
② MASUMOTO Hiroko: Die Schweiz - ein ideales Beispiel der multikulturellen Gesellschaft?
Asiatische Germanistentagung 2008 (日本独文学会主催)、2008 年 8 月 27 日、金沢青陵大学
③ MASUMOTO Hiroko; Erkenntnistheoretische Überlegungen in Spätwerk Dürrenmatts.
Humboldt-Kolleg Rikkyo 2008 (アレクサンダー・フォン・フンボルト財団(ドイツ)・立教大学共催)、2008 年 3 月 15 日、立教大学

〔図書〕(計１件)
① MASUMOTO Hiroko: Erkenntnistheoretische Überlegungen in Spätwerk Dürrenmatts. In: Akio Ogawa u.a. (Hg.): Wie alles sich zum Ganzen webt. Festschrift für Yoshito Takahashi zum 65. Geburtstag. Tübingen (Stauffenburg Verlag), 2010, S.89-102.

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
増本　浩子 (MASUMOTO HIROKO)
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：１０１９９７１３

(2)研究分担者
(3)連携研究者